

聖書を読んでみました

イエスに倣って ～共同体から響同体へ



【第二〇回】 太田 直宏

「実は、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」
(ルカによる福音書 十七章二節b)

コップの中には一%そんな少数派であるクリスチャンの中のちっぽけな「日本キリスト教団」という共同体が、わずかな違いでいがみ合っている。しかも「イエスに倣うこと」を人々にお奨めする「立場の方々」が率先して「右

だ左だ、あちら側だこちら側だ」と声高に言い争っている。イエスに倣うとは何なのでしょ。最近こんな話を読みました。「キリストにお会いしたい」と思って、教会に電話してみましたが、留守でした。日曜の午前中ならと思って、出かけてみましたが、やっぱり留守でした。仕方がないので午後から寿の寄せ場に行きました。炊き出しに並ぶ日雇い労働者の長い列に、

野宿者に配る毛布やスリーブを用意している人たち。：街角で後ろから肩を叩かれました。ふりかえると、そこにキリストが立っておられました。これはある作家が書いた「現代のたどえ話」の一節。果たして私たちはキリストに出会う場所に身を置いていると言えるのでしょうか。「ゴスペルって楽しいね。なんだ心がうきうきして、神さまに会いたくなっちゃった！」

「お互いに仕え合って生きる社会」＝「仕合せな社会」という難しい仕事を果たすることがその使命なのです。「最近のYMC Aには、Cがない」とおっしゃる方には、「では仲間に加わってください。そうして一緒にCを広げていただけませんか」とお願いすることがあります。私は一九八六年クリスマス。私は井戸掘りワークキャンプの参加者として、フィリピンのルソン島のどある農村にいました。時まさにマルコス政権崩壊前夜。

「日本の常識は世界の非常識」を思いしらされた日々でした。大学時代、関西学院でグリークラブの活動に明け暮れていた私は、チャペルアワーに出席する仲間を横目に見ながら「仕事は、生活の糧を稼ぐ手段」と嘯き、就職したつもりでした。しかし、実社会は想像以上の荒海で、二年目の秋に退職。失意のどん底で、「私は何をすべきなのか？」と逡巡する日々が続きました。そんな時、「イエスに再び会いたい」という思いを与えられました。それは家に近いからというだけで両親が入園を決めたカトリック教会付属幼稚園で教えられた優しいイエス・キリストを思い出しては、いくつかの教会を巡りましたが、イエスに出会えた気はしません。仕事もなく心も満たされず、ぶらぶらしていたある日、偶然にも手にしたのが「フィリピン井戸掘り

BIBLE

ワークキャンプ参加者募集」のチラシでした。奮えも感をつきかけていましたが、思い切って参加することにしました。フィリピンに行つてとにかく驚いたのは、ことも苦手としていた私が、沢山のこともたちから慕われるようになったことです。毎朝大勢のこともたちが私の宿泊先の農家にもやって来ました。日々のワークも一生懸命手伝つてくれました。そして迎えたクリスマスイブ。こともたちが「キヤロリングに行こう！」と誘いに来てくれました。しかし、暑いフィリピンのこと。みんな半袖半ズボンで、楽器は弦が二本も切れたおんぼろギター。およそ日本人の持つクリスマスのイメージとはかけ離れた姿で、私たちは家々を巡っていきました。まずはメインストリートにある大きな教会に。キヤロルを歌い、最後は「メリークリスマス」と叫ぶと沢山のキヤンデイーやお菓子がもらえました。ところがだんだんと裏通りに行くにつれて様子が変わり、家が小さくなっていききました。村の中にも、大きな貧富の格差があったのです。最後に訪れた建物は、家というよりは倒壊した廃屋。けれどもみんなは一層大きな声で歌いました。すると

どうでしょう。歌い終わると同時に、次々と大勢の人が出てきました。聴けば夏の台風の被害がひどく、お金がないので、被褥が直すことができないので、でもその家族が、私たちに精一杯のお菓子をくれたのです。一緒に参加していた伝道者が私を傍らに呼び言いました。「今ここにこそイエス様がいるんだよ」。涙がとまりませんでした。

十二月には、近隣の病院に行き、賛美歌を歌い、ハンドチャイムを演奏します。日頃ことも声が響くその日のない病棟でも、クリスマスの日にも私たち歌声が満ち溢れるのです。「イエス様が来て」を聴いてお年寄りが涙を流します。認知症の方が笑うのです。お医者さんや看護婦さんは、これを「クリスマスの奇跡」と呼んでいます。その病院には「ホスピス病棟」もあり、あることもは自分で懸命に考えて「心豊かな毎日を過ごしてくださいますよ」とお見舞いカードに書きました。こんな言葉紡ぎ出す事ができることもたちは、イエスに倣っているなあど心底思います。

「戦争・平和」という課題を共有することで、「ひとりひとりが平和のひとかけ」になることが目的です。毎年大勢のこともと若者が参加し、多くのことを学んでいます。十二月には、近隣の病院に行き、賛美歌を歌い、ハンドチャイムを演奏します。日頃ことも声が響くその日のない病棟でも、クリスマスの日にも私たち歌声が満ち溢れるのです。「イエス様が来て」を聴いてお年寄りが涙を流します。認知症の方が笑うのです。お医者さんや看護婦さんは、これを「クリスマスの奇跡」と呼んでいます。その病院には「ホスピス病棟」もあり、あることもは自分で懸命に考えて「心豊かな毎日を過ごしてくださいますよ」とお見舞いカードに書きました。こんな言葉紡ぎ出す事ができることもたちは、イエスに倣っているなあど心底思います。

神の国なのでしよう。最後に詩を一編紹介します。私たちの教会の仲間が詠んだ「救い」という作品です。

教会に集う人が少なくなり、私も一人の教会員として日々悩んでいます。しかし、教会が単独で苦慮するのではなく、様々な人々が手をとりあうことによって希望が広がる、多くの出会いの中でそんなことを感じています。今、私たちは、教会をベースに、野宿生活者の支援活動やゴスペルクワイヤ、外国人のための英語礼拝など、多くのプログラムに取り組みはじめました。徐々に色々な人が居場所を求めてやって来るようになりました。イエスの伝道とは「一緒に食卓を囲み、共に食事をするような暖かな関係性を大切にすること」だと聖句は教え続けてくれます。居場所なき人に寄り添い、共に生きようとする「響同体」こそが、

帰国後、ふと目にした新聞の求人欄に「YMCA」の文字。募集職種は「青少年指導者」。よく理解できないまま問い合わせをするので、外資系企業ではなく、「キリスト教青年会」とのこと。不思議な導きを感じ、応募したところ、神戸YMCAに採用していただくことになりました。その後、多くの人の支えとお祈りのおかげで教会とも繋がりが、キリスト者として生き始めることができるようになりました。現在は岡山の地で、総主事として「人と神とに仕える事」に日々励んでいます。

間聖句がたの「実は神の国はあなただけの間にある(ルカ一七・二一)」が示されました。フィリピンでのキヤロリングの時、私たちの間には、確かにイエスがおられました。私の井戸掘りワークキャンプは、イエス

互いの違いを理解し乗り越えて、イエスのめざした神の国を広げていくことをそれぞれの現場から始めていきますよ。(おわた ただひろ

一人を救う
一人を訪ね一人を救う
苦しむ者のところへ出向く
一人を救う
痛みの中でも
一人を救う
絶望の死の間際まで
一人を救う
気の遠くなるような救い方、
それがあなたの歩み
それが私たちの
イエス・キリストの
神のあり方
そしてあなたも私も
その一人の一人
互いの違いを理解し乗り越えて、
イエスのめざした神の国を
広げていくことをそれぞれの現
場から始めていきますよ。

教団ジャーナル
「風」23号

2008年3月28日発行
発行人 後宮 敬爾
編集人 久世そらち

連絡先
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-1
早稲田教会会付
TEL 03-3209-8366
FAX 03-3209-0567

郵便振替口座
01670-3-9044
「風」編集委員会